S-face

SFC makes the future through researches

人や組織を変革する
ゆるいコミュニケーション

若新 雄純 ×
小川 克彦

VOL.
007 /100

2015.Oct 発行

和の色：淡群青

“ゆるさ”をキーワードにした実験的取り組みの数々

**細かいルールやリーダーをつくらず、約150人のニート全員が取締役に就任。年商92万円という世界一儲からないNEET株式会社。
現役の女子高校生（JK）が「楽しいまち」を提案し、“ゆるいまちづくり”で話題を集める福井県鯖江市役所JK課。
実験的かつきわめて現代日本的なプロジェクトの数々を企て、各界の賛否両論を集めているのが若新雄純特任助教です。
注目を集めるプロジェクトに込められた思いや狙いに、SFC研究所元所長の小川克彦が迫ります。**

150人ニートを集めて全員取締役の会社を設立!?

小川　若新さんの研究はユニークなものが実に多いですね。中でもNEET株式会社は売上度外視のようですが、その目的は何ですか?

若新　これはNEET株式会社に限ったことではないのですが、僕の研究は人と組織のコミュニケーション、特に人の内発性や多様性を引き出すための、非管理的で非指示的なファシリテーションやコミュニティづくり、ひと言でいえば“ゆるいコミュニケーション”に力を入れています。ニートを集めて会社をつくり、運営するというのも、そうした取り組みであり、実験です。

小川　具体的には、どういう組織で事業を行っているのですか?

若新　まず雇われてしまったらニートになりませんから、約150人メンバー全員が取締役です。基本給はなく、「従業員」にはなりません。事業目的は登記上「一切の事業」としてあり、すぐに儲かるかどうか分からない事業やサービスも、楽しければ飽きるまでやります。代表的な事業としては、1時間1,000円でニート自身が自分を貸し出す「レンタルニート」というサービスが話題になりました。

小川　レンタルニートってなんだか怪しい響きですね（笑）。今までどのようなレンタルをしてきたのですか?

若新　法律に触れなければ、なんでもします。行列ができる店に一緒にならんだり、カフェで話し相手になったり、プラモデルを組み立ててほしいという依頼もありました。

なぞの愛社精神を生んだ“ゆるい帰属意識”

小川　実際のところ、NEET株式会社は儲かっているのではないですか?

若新　いえいえ。2014年の年商は、たったの92万円でした（笑）。そもそもの動機が、ニートたちに対して大人がたきつけて何かをやらせるということではなく、「思わずここに来ると、何かをやってしまう」というような、自ずから出てくるモチベーションをどうつくるかという実験ですので。

小川　ニートに仕事のお世話をすることが目的ではないと。

若新　はい。僕は、彼らを社会復帰させようとは思っていないのです。今までの社会で良しとされてきた社会人像に、彼らを近づけるのではなく、今までの価値観とはぜんぜん違うところで、彼らが自らがんばろうと思えるような、“内的動機付け”“内的なモチベーション”のようなものを、どうやってつくるかということに意義があるのです。

小川　給料や地位といった外的な動機付けが与えられても、ニートたちは働きたいとは思わないということですね。

若新　そうなのです。一方で興味深いのは、こんなにも稼げない会社なのに、昨年度の取締役更新の際も、ほとんどのメンバーが辞めなかったことです。むしろ、愛社精神さえ感じられます。これは組織への束縛の代わりに与えられる報酬ではなく、自分がそのコミュニティに自由に参加でき、関わりあっているという“ゆるい帰属意識”のようなものが生まれているからだと思います。

“ゆるい市民”の代表・JKが大人たちの社会を変える

小川　まちおこしに女子高校生が参加する「鯖江市役所JK課」という取り組みは、マスコミでも大きくとりあげられましたね。

若新　JK課のコンセプトで一番大事な点は、まちづくりなど考えたこともない普通の市民、僕はそういう人たちを“ゆるい市民”と呼んでいるのですが、その人たちが楽しめるような空気をつくることでした。この“ゆるい市民”の代表がJKたちなのです。彼女たちにはまちの活性化や地域の仕組みづくりといった、専門家や地域活動に関心の高い一部の市民にありがちな、硬直した考え方はありません。まちづくりを理屈で考えてしまう大人たちが、JKたち“ゆるい市民”に振り回される状況をつくることで、新しいコミュニケーションや、コミュニティにやわらかさが生まれるのではと考えたのです。

小川　なるほど。“ゆるい市民”が“やわらかいカオス”をつくり出すということですね。その結果、地域の社会が変化をしたということですか。

若新　はい。1年間で20以上の企画や活動が生まれ、テレビや新聞でも100回近く取り上げられました。しかし、そういったPR効果以上に、若者たちをあえて主役にし、大人たちがそれに振り回されることで、教えるよりも共に学ぶことの重要性という気づきや世代を超えた連携が生まれ、地域の大人たちが変化したことが最大の成果だと考えています。

日常の試行錯誤になじむ“ゆるい”という言葉

小川　若新さんは、自身が提唱する“ゆるいコミュニケーション”というものを、どのように捉えていますか?

若新　よく、「これからのコミュニケーションは一方向ではなくインタラクティブであるべき」とか、「アクティブで能動的なコミュニケーションをするべき」などといわれます。しかし、こうした海外から輸入された概念というのは、僕らが日常の中で試行錯誤している感触に、ぴったりとこないのですね。

小川　たしかに、アメリカではJKなんて言わないですものね（笑）。

若新　僕がニートやJKたちに、一緒にやろうとしている概念を説明するとき、いつも使っているのが「ゆるい」という言葉です。ゆるいというのは、絶妙な表現だと思うのです。プロジェクトの中では、彼らに僕がガチガチに関与するわけではありませんが、一方でさっぱり放置しているわけでもありません。つながってはいるけれど、分かりやすい答えややり方を決めつけず、一緒に悩むのです。それが、僕の考える「ゆるさ」です。

ゆるいコミュニケーションは現代における「半学半教」

小川　でも、若新さんの言う“ゆるいコミュニケーション”を、リーダーや教師の立場で実践しようとすると、相当な忍耐がいりませんか?

若新　僕は、指導する人が答えを持っていなければならないという思い込みを、手放す必要があると思っています。実際に僕も、あるいはニートやJKに関わる大人たちも一緒に悩みだすと、一見、グダグダな時間が長く続きますが、すると彼らは自分たちで考え始めます。自分たちで考えざるをえない、ということでしょうか。そして、一緒に悩んでいるこちらを信頼して、自分たちはこう考えるがどうだろうかと、そういう対等な議論にもなってきます。一度こういうスイッチが入ると、後は自発的に動き出します。もちろん、かなり時間がかかる場合もありますが。

小川　それはまさに、福澤諭吉先生がいった「半学半教」ですね。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）の理念で言えば、問題解決ではなく問題発見。若新さんの取り組みの数々は、教える側や教わる側という概念を超えて、そこにいる全ての人が学びあうという意味で、まさに「半学半教」の実践ですね。

うにゃうにゃと模索し続けるコミュニケーションの「場」を

小川　若新さん自身が、SFCでゆるいコミュニケーションの「場」をつくるという構想はないですか?

若新　今の教育は課題解決型といいながら、先生が教壇に立ち学生が指示されて学ぶ、ある種の軍隊的な組織やしくみがあります。しかも、誰もがそういう組織やしくみが嫌だといいながら、実際にそれを辞めると、みんなそわそわしてしまうのです。マネジメントされたくないと言いながら、マネジメントされたいという複雑な状態になってくるのです。

小川　求心力が無くなる。まったくの自由は、自由ではないのと同じですね。

若新　僕自身は、どこに答えがあるのかを探すよりも、何が答えか分からないけれど、うにゃうにゃと模索し続けるような「場」をつくらなければと思っています。そして、そういう研究ができる機関がSFCなのではないかと思います。このキャンパスを活用して、これからも様々な研究プロジェクトをつくっていけたらと思っています。

小川　SFCでは今後、先生と学生が2～3週間、一緒に泊り込んでテーマに取り組み何かを得ようという「未来創造塾」という実験的な教育を行う予定です。そういった新しい教育の取り組みにおいても、今回、若新さんの指摘してくれた新しいコミュニケーションのあり方は、たいへん示唆に富んでいるように思いました。

Sabae City Office JK Section
鯖江市役所JK課

従来、大人が教育・管理しなければ“一人前”にならないと考えられてきた若者たちをあえて主役にすえ、大人たちも共に活動する機会を作り、「半学半教」を実践した鯖江市役所JK課。

NEET Co., Ltd
NEET株式会社

150人近くのニートが、全員取締役に就任しているNEET株式会社。細かいルールやリーダー役を作らず、あえてゼロから自分たちで試行錯誤するといコンセプトの会社で、年収はたったの92万円。

Job-hunting Outlaw Recruitment/ Narcissist Recruitment
就活アウトロー採用／ナルシスト採用

就活アウトロー採用やナルシスト採用では、教育や研修は一切行わない。当事者同士が、お互いに自由に発言・表現できる“やわらかいカオス”を作り、マニアックな自分を上手に他者や社会に接続していけるようにしている。

Profile
若新 雄純
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任助教。同大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。専門は、内発性や多様性を引き出すための人と組織のコミュニケーション論、産業・組織心理学。

Profile
小川 克彦
慶應義塾大学環境情報学部教授、SFC研究所元所長。同大学大学院工学研究科修士課程修了。専門はコミュニケーションデザイン、ネット社会論、ヒューマンインターフェース。

詳しくはWebサイトへ

詳細インタビューや動画もご覧いただけます

S-face　検索

慶應義塾大学SFC研究所
慶應義塾大学 湘南藤沢事務室 学術研究支援担当
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322
Tel: 0466-49-3436（ダイヤルイン）
E-mail: info-kri@sfc.keio.ac.jp